

ヒシャム・ハッサン

『近代日本史・明治編——一八六八—一九二二年』

Hisham Abdulrauf Hassan, *Tarikh Aljaban Fi Assr Meiji: Assr Alnahda Alwula*

1868-1912. Cairo: Daar AlMaaruf, 2013.

アハマド・モスタファア



一九八八年に、甲南大学文学部で修士号を取ったヒシャム・ハッサン氏は日本史について一連（五冊）の著作をアラビア語で著してきた。今回の書評の対象は二〇一四年一月に同氏が著した『近代日本史・明治編』（アラビア語）という書籍である。

ヒシャム氏はカイロ大学日本語学科の教員ではないが、当著書をはじめ、同氏がこれまで出版した一連の日本史書籍は日本語学科の教科書として将来大いに役立つと思われる。これまで数十年にわたって日本語学科で使用されてきた日本史の教科書は、基本的にほとんど日本人ジュニア向けのやさしい日本語で書かれたものである。

アラビア語で書かれ内容も充実したものだけに、その価値が認

められよう。私は客員研究員として国際日本文化研究センター（日文研）に一年間（一九九八年七月一日から一九九九年七月三十一日まで）勤め、日本戦後小説の研究に没頭したが、この一年の間に数多くの有能な外国人日本研究者と交流を深めたおかげで貴重な経験をさせていただいた。なかでも、西洋や中国、韓国の日本研究の現場では、それぞれの自国語で日本文化や歴史などが教授されているという知識を教えられたことである。日本についての知識を、自国の学習者や若き研究者にそれぞれの自国語で教えることは、量的にも内容的にも、日本語で教えるよりも効果的であることを教えられたのである。この経験を生かせば、エジプトや中東における日本研究がめざましい発展を見せることは確実だろうと思わ

れる。この意味において、ヒシャム氏の努力は中東における日本研究には多大な貢献になるろう。

当書籍のプロログで、ヒシャム氏はこの本の執筆に挑んだ意義について触れ、これまでの同氏による一連の日本史の各過程をとりあげた著作の内容とそのプロセスを丁寧に説明した。なかでも注意に値するのは、『ムハンマド・アリと明治天皇——エジプトの近代化と日本の近代化』（二〇〇九年）の説明の箇所である。ここで同氏は、「エジプト歴史研究者の大家たる故ユーン・ラビーブ氏の助言を受けて私は、アラブ人読者に日本の近代化の歴史的なプロセスをより効果的に紹介し、理解させるため、エジプトの近代化のプロセスに照らしながら当書籍を制作した。また、近代化の両経路を比較した結果、それぞれの長所と短所に焦点を当てることができたのではないかと思われる」と述べた。

また、プロログでヒシャム氏は、「この本は日本近代化の歴史的なプロセスの側面だけでなく、当時の日本の社会や文化や経済等のあらゆる側面をとりあげた。これでアラブ人読者は日本のあのころの姿を垣間見ることができようと思われる」と説明した。この本があらわれた二年後の二〇一一年一月二五日に、エジプトではムバラク政権に対する民衆蜂起が勃発したが、愛国心に燃えたエジプト人知識人の一部が、ヒシャム氏のこの著書を読んで得られた教訓が数多くあると思われる。というのも、この

蜂起にあたってエジプト人は、アメリカをはじめとする西洋文化・文明と自国エジプトのものとの係わり合いや衝突の中で、自己のアイデンティティを見出すことができたからである。

事実として、この書評の対象になっている『近代日本史・明治編』の出版までに、エジプト人やアラブ人歴史研究者は日本史、特に明治時代について様々な著書を著してきている。たとえば、カイロ大学名誉教授の故ラウーフ・アッバース博士らは三十年ほど前に、『明治時代と日本社会』（アラビア語）というタイトルの本を出版した。しかし、故アッバース博士らは日本の一般的な歴史背景の紹介に留まった。ヒシャム氏は日本の大学で日本文学や文化を勉強し修士号を取得した日本研究者であるだけに、『近代日本史・明治編』では日本当事の社会事情について奥深い、そして鋭い眼差しで分析を試みたといえる。この点においてヒシャム氏は、中東日本研究において大きな貢献をしたと認めざるを得ないであろう。

『ムハンマド・アリと明治天皇』でヒシャム氏は、エジプトと日本の近代化の比較を通して両国の近代化の試みの相違点と共通点に照明を当てた。そしてこの延長線上に今回、『近代日本史・明治編』を著したのである。

『近代日本史・明治編』は以下の八章からなっている。

第一章 鎖国政策時期の終焉・明治維新の兆し

第二章 明治時代初期

第三章 世界に扉を開く「強国」の誕生

第四章 明治国家の内乱

第五章 近代国家の国づくりと政治思想

第六章 日本と世界との接触・日清戦争及び日露戦争

第七章 政治・経済の強い明治国家

第八章 明治時代における文明・文化の発展

こうして本の構成を見通すと、著者のヒシャム氏が明治時代の全体図をカバーするような分析を試みていることがうかがわれる。たとえば、ヒシャム氏は第八章で明治時代の文化的な特徴をあらゆる面から取り上げた。

1 教育改革 ヒシャム氏は、一八七三年の時点において日本全国では学校の数が一万二千五百校（八千五百校が公立で四千校は私立）にふくれあがったこと、登校率が男子の場合四六％、女子の場合一七％に増えたことに触れた。また、一八八六年に帝国大学、一九〇八年に東北、一九一〇年に九州大学にも帝国ができるなど、全国的に年々大学が設立していったことについても述べた。また、明治政府が西洋の学問を取り入れる努力において、有力な外国人

の学者や教師を数多く呼び寄せたことについて詳しく説明をした。

2 出版物の普及 この八章でも、『横浜毎日新聞』や『東京新聞』や『朝日新聞』などのような日刊新聞の誕生の他、多目的な雑誌の発刊について詳しく紹介されている。また、「小説」という新しいジャンルの誕生とともに、たくさんの書物が読者の人気を集めたことを詳細に取り上げた。ここで同氏はいくつかの文学流派の展開についてたどっている。

3 明治思想の展開 西洋近代思想の流入をめぐって、明治時代に様々なイデオロギーが錯綜し、論争が展開したことについて同氏は客観的に述べた。

4 様々な文芸の普及 建築や絵画、演劇、音楽、様々な文芸のジャンルをカバーしながら同氏はその展開や経緯について詳しく紹介した。エジプトにおいては、一九九七年以降、数人のエジプト人日本研究者が、主に翻訳を通じて、文学・文化・歴史などのジャンルにおいて四十冊以上の出版物をアラビア語で出し、日本のことをアラブ人読者に紹介してきた。しかし、著作の活動においてヒシャム氏は日本の歴史紹介という方面に独創的な趣を示し、めざましい活躍を果たしたことをここで認めておきたい。